標高2,500メートルの山荘が教えてくれる医療の原点。

AED（自動体外式除細動器）などの医療器具も正確に使用されてこそ。
普段からの反復練習がいざという時に活かされます。

香川大学医学部 三俣（みつまた）診療班

主なサークル活動は、校舎の近くのアスレチック公園で基本的な体力づくり。はたまた、剣山や石鎚山といった四国の名峰でのハードな山登りトレーニング。そして夏には約10キロの荷物を背負い、徒歩で丸2日かけて標高2,550メートルの北アルプスへ！といっても、山岳部やワンダーフォーゲル部ではありません。

サークル名「三俣（みつまた）診療班」。医学部の学生のみ参加が可能で、実は山登りではなく、その後の夏山山荘での活動こそがサークルの目的です。

「毎年、7月中旬からおよそ1ヶ月間、岐阜・長野・富山の各県境をまたぐ三俣山荘にある診療所で、登山者や山荘スタッフを対象に医療ボランティアを行っています」とは部長の杉浦潤（すぎうらじゅん）さん（医学部5年）。岡山大学三俣診療班と合同で診療所を運営。シーズンになると、全国から医師や看護師のボランティアを募りながら学生チームを8班ほど結成し、各班交代で山荘に泊り込みます。期間中は医師の指導のもと、高山病や切り傷、捻挫など、登山者に多い病気やケガを適切にケア。重症の患者には下山等の付き添い、さらには診療所内の医療器具や薬剤の調達も学生自らが対応するそう。診療所の運営に必要な一切を段取りし、細やかに切り盛りします。と、ここまでお話を伺うと、責任の重大さがひしひしと伝わってきますが、副部長の川久保充裕（かわくぼ みつひろ）さん（医学部4年生）は、「あまり深刻に考えないでください。楽しいこともたくさんありますから（笑）」。刻々と美しさが変化する北アルプスの雄大な自然。学生時代から体験できる、患者との貴重な触れ合い。先輩医師や看護師との実り豊かな語らいなど、そこでしか得られない魅力を熱く語ってくれました。

現在、サークルに登録しているメンバーの数は15名。ただ毎年、医師や看護師も合わせて、ボランティアスタッフ不足に悩まされているとか。それでも部長・副部長のお二人は「山で会おう！」を合言葉に、スタッフ集めに奔走しています。

「医療の原点ともいえる助け合いの精神」。今年の夏も三俣診療所に、しっかりと宿りますように。

香川大学ハンドボール部

キリリとした精悍な面持ちの山下哲平さん（教育学部3年）とキビキビとした印象の山原真弓さん（教育学部3年）。香川大学公認部活動であるハンドボール部の男女両キャプテンは、スポーツマンらしいさわやかな力強さを備えています。バスケットボールの俊敏さとラグビーのタフさを持つことを必要とされるハンドボールは、試合はもちろん練習もハード。男子は週4回、女子は週3～4回、平日は2時間半、休日は半日以上、汗を流します。現在部員は男子16名、女子18名。普段は基礎トレーニングなど体力づくりを中心に、そして試合前は実践的な練習で調整しています。

「入学前は、中学・高校時代と違って、大学に入ったら真剣に部活に取り組むということはないんじゃないかと思ってたんですよね。でもこの部はやるときはやる、その雰囲気がよかったですね」。中学時代に姉の影響からハンドボールを始めたという山下さんには、自分も中学教師になったら顧問としてハンドボール部を指導したいという夢があります。そのためにも、今のキャプテンというポジションは、教師になったときに『どう指導すべきか』を考えるいい機会でもあるそう。「自分のことだけでなく、チーム全体のことを考えるクセがつきましたね」。

『今のチームに必要なこと』を中心に考えることで、部員とぶつかることがあったとしても、「反発を受けても結果を出していくことで、分かり合える」という確信が生まれたそう。この確信はきっと教師になった際も大きな糧になることでしょう。

一方、中学ではハンドボール部に所属したものの、高校時代は離れていたという山原さん。「ボールに触れたら、またやりたくなって…それから、先輩を始め、部活の仲間がみんな仲良かったのも、理由でしたね」。仲がいいといっても馴れ合うわけでなく、大きな目標に向かっていっしょに切磋琢磨していく運動部ならではの友情。それにめぐり合えたのも大きかったと微笑みます。そして今年、チームをまとめる立場になったことについては「キャプテンにならないと考えないことを考えるようになり、今までとは違う見方ができるようになりましたね。視野が広がったというか…」最初は伝わらない思いも、試合に勝つというひとつの方向を向いて練習に励むうちにみんなに伝わり、一丸になれるという経験も「ハンドボールを通して学んだこと」。男女チームがあることでキャプテン同士意見をぶつけ合うこともあり、「リーダーとしての考え方も何倍にも広がる」とうなずきあいます。

「大学に入ってまで、と思うかもしれませんが、真剣になる何かがあるからこそ、学べることはたくさんある。本気になるからこそ、見えるものは必ずあるんです」と真摯な眼で語るふたりが率いるハンドボール部は、夏の大会に向けての士気を高めています。